

【個人研究】

平和・安寧・普通の生活を追求する海外研修

藤田 雅子^{*}

Studiebesök om fred, trygghet och vardagsliv

Masako FUJITA

Humanitara vetenskapliga institutionen har arrangerat årliga studiebesök för dess studenter till Skandinavien under 10 år. Samt besök till Bangladesh och Thailand under 7 år med möjlighet för studenter från andra institutioner att medverka.

Denna rapport sammanfattar innehållet i dessa studiebesök.

Meningen med programmet är att studenterna ska kunna skaffa sig en egen sund världsbild. Samt att socialt arbete ska kunna bidra till att skapa tankar om deras framtidsplaner. Besöket till Skandinavien var för att lära sig principen av "normalisering" samt finna en metod till att uppnå den. Betydelsefullt var att förstå hur svaga och utsatta människor kan bli jämlika och integreras i samhället, därmed spelar utbildning en stor roll.

Det var därför speciellt viktigt att studera andra länders skolutbildnings system. Programmet omfattade besök till förskolor, grundskolor, skolor för handikappade barn, Sociala högskolor, utbildnings myndigheter och organisationer för handikappade. Samt studier av offentlig äldre omsorg och stads-, bostadsplanering.

Studiebesöken hade dels annat syfte som relationen mellan U-hjälp och befolkning. I Bangladesh och Thailand undervisar tema fred med hjälp av material från Japan under andra världskriget. Vi samtidigt försökte samla kunskap om ländernas religion, historia, politik och folkets vardagsliv. Vidare gick besöket till bland annat lokala marknader och privata hem. Problem med vägtrafiken studerades också.

Sedan förra året, tillkom ett nytt program där vi försökte ta reda på situationer för gatubarn i storstäder och jordlösa folk på landsbygden. För detta syfte, besökte vi ålderdomshem och barnhem.

Alla dessa program hade ett gemensamt huvud tema vilka fred, trygghet och vardagsliv.

(This resume is written in Swedish)

^{*}ふじた まさこ 文教大学人間科学部人間科学科

1 平和・安寧・普通の生活を追求してきた海外研修

1 海外研修と大学教育

人間科学部が実施してきた福祉と教育の海外研修は、今年度で10回を迎える。また国際交流委員会企画による全学に開かれたバングラデシュとタイの研修は7回目となる。両方の研修を主として企画し、学生の指導し、引率してきた藤田が、今年度を最後にこれらの研修から退くにあたって、両研修のアウトラインをまとめておこうと考える。

地球規模での思考が要求される現在において、次代を担う世代が海外研修を通して、健全な世界観を構築することは大切である。時代がかった言葉ではあるが、南北問題という表現に象徴されるように、先進工業国と途上国との経済格差は、人間の営みに多大な影響を与える。北欧のように富の再配分によって社会保障と社会福祉を制度に位置づけている国々もあれば、1人当たりのGNPを1日に換算すると1 \$以下のバングラデシュのような後発開発途上国もある。限られた条件下において生活の質の充実のために人間は何をなすのか。福祉は安寧を意味するが、広義の福祉活動を経験することによって、日本の社会福祉、教育あるいは国際協力などを担うであろう青年達が、自分たちの進むべき方向を日本の外から見極める機会になるとよいと考える。

大学における海外研修は目的の、構造的であるべきだし、大学の教育の一環であるからこそできる内容である。大学の使命である研究を教育に反映できるという利点もある。

2 海外研修の足跡

人間科学部の福祉・教育海外研修は、単一学科であった人間科学科が学生に広く福祉先進国の福祉と教育について学んでもらう機会をつくるという目的で、模索的に開始された。第1回は1991年度にイギリス、ドイツ、デンマークの3カ国を選び、今は他大学に籍を移している森井利夫先生たちと最初の引率をし

た。現在では福祉先進国が集中する北欧を研修の足場にし、社会福祉を掘り下げ、高度の社会福祉を可能にする社会を映す鏡である学校教育を学習する場となっている。費用や日程、交通機関の関係で、スウェーデンとフィンランドに限定し、密度の濃い内容である。カリキュラムの変わり目の1998年度は実施しなかったが、毎回、引率は学部1～2名の教員や助手の協力を得て実施してきた。

一方、国際協力や経済機構、環境問題や生態系の維持など地球規模の問題解決が求められていると同時に、社会福祉の分野においても国際福祉という観点が必要とされている。1992年度にバングラデシュとタイに研修の打合せに訪れたが、1993年度は時期早尚という理由で流れ、1994年度に第1回の研修を実施した。2回目までは事務局の協力を得て実施し、第4回目から国際学部の奥田孝晴先生と共にこの研修を軌道に乗せてきた。なお1998年はバングラデシュの大洪水の後遺症を懸念し研修を中止した。

3 研修・安全・交流の三位一体

文化も言語も異なる外国を、日本の習慣、経験、価値観で判断しようとすると、カルチャーショックに陥り、不安が高くなったり、逆に躁状態が続き、精神的に不安定になる可能性もあるので、事前の適切な情報提供が不可欠である。しかし研修参加以前にすでになんらかの精神的あるいは身体的な問題を抱えている学生に対しては、個別対応が求められるので、通常より多くの引率者が必要になるが、事前に詳細を知るのはむずかしいし、仮に分かっていても実際は引率を増やすのは容易ではない。現地へ赴き食の部分で適応できないと、研修自体が未消化になりやすいので、この点の配慮も求められる。安全と共に精神的、身体的両面の健康の確保が最優先課題である。

バングラデシュとタイの研修では、北欧福祉・教育研修以上に旅の側面に細心の注意を払い、研修が円滑に進められるように、引率教員は事前指導の時点から指導を徹底する。

日本ではあまり問題にならない宗教上の制約もあり、とくに日本人には馴染みの薄いイスラム教については、現実に即した情報を提供する必要はある。

さらに両研修ともに福祉の基盤である生活の場に足を踏み入れる機会も多いので、失礼がないように、そして国際交流ができるように努めている。要するに海外研修は、研修内容の精選と体系化、旅行に伴う安全対策、人的交流といった3条件が三位一体となって達成されるもので、単に福祉や教育の制度を知り、現場が見られれば研修の目的が達成されるというものではない。

4 研修の構造

北欧福祉・教育の研修はその構造は単純で、社会福祉の当面の課題であるノーマライゼーションの原理の具現化の状況と方法を学習することにある。さらには社会福祉のニーズを有する人間が社会において平等の地位を獲得し社会参加を遂行するためには、教育、特に学校教育が果たす大きいと考えられるので、教育についても体系的に学習する機会を設けてきた。情報提供は講義「国際福祉論」で

きるし、学生に動機づけとレディネスがあり、能力の高い通訳と適切な研修の場の協力が得られれば、つつがなく実施が可能である。

一方バングラデシュとタイにおける研修は、課題は複合的で、移動を除けば10日間にいかに体系的に目的に応じた研修を組み込むかが問題になる。しかも2キャンパス、5学部から学生が参加するので、各学部の特性も考慮しなければならない。情報提供も授業で一律に行うのは全学的には不向きなために、事前のオリエンテーションが重要になる。

海外福祉研修の理念や意義にページを割くよりも、「バングラデシュ・タイ研修」と「北欧福祉・教育研修」の実際を報告するほうが実質的であると考えられる。研修終了後に学生のレポート集を作成する際に、引率と指導の立場から藤田も拙文を入れている。2000年度の両研修のレポート集に寄せた文章を、研究紀要として抜粋、加筆し掲載する。

2 バングラデシュ・タイ研修の実態 (第6回バングラデシュ・タイ研修の事後レポート集の抜粋および加筆)

表1 バングラデシュ・タイ研修の事前オリエンテーション枠組み

事前オリエンテーション		
研修内容の学習	旅の心得	コミュニケーションと役割分担
予備情報提供	安全と健康の自己管理の徹底	ルームメートを基本に班結成(3班)
個別課題のレポート	5カ条の誓約書提出	27名全員が、ひとつは役割を担う 団長(1名)/副団長(1名)
事前レポート集の作成	訪問先での礼儀と国際交流 気候、風土、宗教を考えた服装	班長(3名)/副班長兼会計(3名) 訪問先別係 (手土産・挨拶・礼状)(12名) 衣類寄付(2名) カメラ管理(2名) アルバム(3名)

表2 バングラデシュ・タイ研修の事前学習個別課題

領域	個別課題
自然・地理・交通	バングラデシュの気候と作物 / バングラデシュの洪水とサイクロン タイの気候と作物 / バングラデシュの地理と交通 / タイの地理と交通
政治・経済（産業） 国際	バングラデシュの政治 / タイの政治 バングラデシュの経済 / タイの通貨危機と現在 S A A R C（南アジア地域協力連合）とバングラデシュ A S E A N（東南諸国連合）とタイ
戦争と平和	第2次世界大戦末期のインパール作戦 / 映画「戦場にかける橋」
宗教	イスラム教徒の生活（バングラデシュ） / 仏教徒の生活（タイ）
子ども・女性	「子どもの権利条約」と途上国の子ども / ストリートチルドレン / 児童労働 バングラデシュの教育 / タイの教育 / バングラデシュの女性 / タイの女性
マイノリティ 貧困	タイとバングラデシュのマイノリティ 土地なし農民（バングラデシュ） / タイとバングラデシュのスラム
民間活動（NGO）	バングラデシュのNGO活動 / タイのNGO活動

1 多面的思考を磨く

第6回バングラデシュ・タイの研修を終了した。これまでよくも継続できたものだという感慨がある。第3回から研修のパートナーである国際学部の奥田孝晴先生は、昼間の指導に加えて、就寝前に「奥田ゼミ」を開催し、生きた体験が学生たちの糧になる学生指導には頭が下がる。もちろん今回この研修に参加した5学部からの27名の学生の熱意から、21世紀は若い世代に期待できる感触を得ることができた。

オリエンテーションや事前レポート集の作成など日本出発前に、すでに研修はスタートしている。この研修の目的は単純ではないが、一言で表現すれば、多面的思考の重要性を体験するためである。そのためには気力と体力そして柔軟な思考体系が求められる。固定観

念を分解し、体験をもとに再統合するのである。とても観光気分ではついてこられる内容ではない。月に一度しか医療チーム（それも初歩的医療）が巡回してこないバングラデシュの農村まで足を運ぶ。学生が何かを得られればいいという手前勝手な考えではなく、現地の人びとに失礼があってはならない。次世代を担う若者が、世界の人びとと同等で、友好的な人間関係を結ぶことが大切である。

2 事前学習の意義

事前指導は表1に示すように、研修に関する内容と旅の心得に2分される（注1）。

研修の場の厳選と事前学習の大切さ

学習効果が大きいように研修の場を厳選しているが、生活や文化の背景、自然や歴史、そして研修内容まで、事前学習は広範に渡る。

情報提供はなされるが、レディネスと動機づけの意味から、個別の課題が与えられる。表2のように研修に不可欠な項目を人数分準備し、個々の関心に基づいて選択させ、事前レポート集を作成する。事前レポート集を読めば、研修に必要な予備知識は網羅されているので、これを直前オリエンテーションで予習に使い、研修中にも活用する。学生は手探り状態で、参考図書やインターネットを使ってレポートを作成する。

バングラデシュとタイにおける本番の研修で体験を通して、そして現地での生の情報を得て、事前に調べた課題が肉付けされ、関心を拡大させていく。研修後に全員が事前レポートと同じ課題でレポートを提出する。加えて研修全体を通して得た収穫を文章化するので、事後レポート集は個別の課題と研修全体に対するレポートの2部から構成される。

研修の前提としての旅の心得

実りある研修にするために表1に示すように、安全と健康の自己管理、参加学生相互の思いやり、引率教員に対する信頼が求められる。旅の心得として、1)パスポートの自己管理、2)生水・氷・生野菜の飲食禁止、3)暴飲・暴食の禁止、4)集合時間の厳守、5)引率教員の注意に耳を傾ける、は最小限の約束(5カ条の誓約)である。実際は2)と3)の飲食物と、4)集合時間を全員に徹底するには、引率は時間と忍耐を要する。

現地で必要とされる費用(空港税、飲料水、寄付、チップなど)についても情報を提供し、とくに水(ダッカでは安全な飲料水を一括購入)に関しては、費用を惜しまないように指示し、研修中は水分補給を促した。

グループ作りと学生相互のコミュニケーション(注2)

5学部から参加する学生全員でこのむずかしくも心躍る研修を完成させるのであるから、メンバー間のコミュニケーションが大切である。孤立してもいけないが、はしゃぎすぎ、あるいは傍若無人の学生(グループ)にかき回されても困る。全員の安全と健康が保たれ

なければ、研修は全うできない。

2週間は長い。ルームメイト(基本は2名。望めば3名)は気心が知れた友人がいい。誘い合って参加した学生ばかりではないので、個人で参加した学生が疎外感を感じないように配慮が求められる。

同室者を決定すれば、次はグループ作りであるが、点呼やグループ行動の場合も10人前後の人数が都合よい。5学部から集まっているので、グループ作りはアットランダムにしている。軌道に乗れば、思いやりと相互の意思の疎通が可能になる。

全員が大切な一つの役割を担い、全体を保つ(注3)

表1の右側に示すように全員がなんらかの役割を担う。団長は参加者の多い湘南キャンパスから、副団長は越谷キャンパスから選んで、全員を3班に分け、各班ごとに班長と副班長をつくり、副班長は会計も担当する。

現地で研修に協力して下さる機関や人物は多い。自分たちが学べばいいというのではなく、感謝を態度で示すことも忘れてはならない。研修先や訪問先への手土産の購入(費用は大学)と持参、手渡しとお礼の言葉、住所と担当者の確認(前もって記入用紙を配布)そして帰国後の礼状と関連写真の送付まで一連の任務をこなす。学生各人が前回までのヒントも参考にし、工夫を凝らし、よい土産を選んで、帰国後は写真を添えて礼状を送ってくれているから、次の研修につながっている。

寄付をするといっても必要としている人に、必要な品を届けるのは意外とむずかしいものである。冬物衣料の寄付は学生の大半が協力し、2名の学生がまとめて、仲介者に毎年手渡している。忙しい研修で、一仕事を増やすし、1枚のセーターは絶対的貧困を解決はしないが、1人の人間を冬の間暖かく包んでくれる。一部の施設での寄付や小物プレゼントにも、全員が協力してくれている。

研修の記録である写真は旅行後の楽しみでもある。研修中はカメラは代表1台に限定し、一眼レフのカメラとフィルムを大学から持参

し、現像依頼まで担当する係が必要である。プリントされた写真を整理し、日付を追って、研修先を明記し、アルバムにして、参加メンバーからの注文を受ける係も前もって決めて

いる。
各個人が役割をこなすことが、研修を円滑に進行させる潤滑油である。

表3 バングラデシュ・タイ研修の主たる研修の場

バングラデシュ			バングラデシュ タイ (両国)	タイ
都市部の労働		農村部の労働		
児童労働	産業	土地なし農民	平和学習	子どもと高齢者
Shoishab (NGO) 家内労働(メイド など)に従事する 子どもの教育	郊外の大規模縫 製工場 (輸出製品) (外貨獲得)	Swanirvar (NGO) マイクロクレジット 農民組織(シヨミティ) 女性の経済的自立 農民銀行 職業開発	インパール作戦 バングラの インド国境 戦没者墓地 (日本軍兵士)	親の保護がない子ども 子ども村(カンチャ ナプリ) 養護施設兼学校教育 (民間施設)
UCEP (NGO) 児童労働に従事す る子どもの初等教 育と職業教育	郊外の伝統産業 手織物工場 (国内向け)	保健 家族計画 地域の医療組織	タイの カンチャナプリ 戦争博物館 戦場にかかる橋 泰緬鉄道	家族の支えのない高齢者 バンケイ老人ホーム (国立施設)
海外協力とNGO				
訪問日 12月10日(ダッカ市内) 12月11日(ダッカ市内)	12月13日 12月15日	12月12日(ガジプール・ シャパール) 12月14日(ダウドガンディ)	12月14日(バングラ側) 12月17日(タイ側)	12月18日(カンチャナプリ) 12月20日(バンコク)

3 研修内容・スケジュール・研修目的

表3に主たる研修の場を示す。バングラデシュでは労働と生活の関係、タイでは保護を要する人のサポートについて学ぶ。さらに両国に跨って戦争(第2次世界大戦)と平和について日本との関係を研修する。表4は日程を、表5は付随的な研修目標と場を示す。

平和と命の重さを知る

平和は大切である。タイのカンチャナプリ

で毎年、戦争博物館や連合軍墓地を訪問する。今回は、当時は泰緬鉄道と称され、現在は地元の人々の交通手段で、観光資源にもなっている列車に乗車する機会をつくった。事前レポートの課題にインパール作戦と映画「戦場にかかる橋」が含まれ、この鉄道の意味について予習している。日本語の乗車証明書ももらったが、裏を返せば英語で日本軍による「死の鉄路」について詳細な記述がなされている。

表4 バングラデシュ・タイ研修の日程
(2000年12月8日～12月21日)

12月 8日(金)	タイ航空で成田発バンコク着
12月 9日(土)	タイ航空でバンコク発ダッカ着 オールドダッカ(旧市街)と河川港の見学
12月10日(日)	Shoishab(家内労働児童の教育に携わるNGO)で研修 大規模市場「ニューマーケット」見学 Montaz Bhuiyan氏による講義「バングラデシュの政経と生活」 ホームヴィジット(全員夕食招待)
12月11日(月)	ヒンズー教寺院、バングラデシュ国立博物館 UCEP(児童労働に携わる児童の初等教育と職業準備教育に携わるNGO)
12月12日(火)	終日フィールド(NGOであるSwanirvarの協力) ガジプール(Gazipur)でマイクロクレジットの研修 Gazipur県庁(旧領主の館)で講義と県庁内の見学 シャバル(Saval)のサテライトクリニックで医療サービスの研修 Savalの中央保健所で保健と家族計画の研修 Savalのナショナルモニュメント
12月13日(水)	チョードリ(Matia Chowdhury)農業大臣との会見と一問一答 輸出用縫製工場ORIONの見学 成人日本語学校の見学と交流
12月14日(木)	終日フィールド(Swanirvarの協力)とインド国境まで遠出 ダウドカンディ(Daudkandi)でマイクロクレジットと職業の関係研修 農民銀行の業務の研修 マイナマテ(Mainamati)の仏教遺跡(世界遺産)と博物館見学 コミラ(Comilla)でホームヴィジット兼休憩 戦没者墓地(第2次世界大戦時)の日本兵墓地
12月15日(金)	終日リバークルージングによる研修 伝統的手織物の工場に寄る バングラデシュさよならパーティ
12月16日(土)	タイ航空でダッカ発バンコク着
12月17日(日)	バンコクよりカンチャナブリへバスで移動 平和学習(戦争博物館・旧泰緬鉄道に乗車・連合軍墓地・慰霊塔)
12月18日(月)	カンチャナブリの養護施設兼学校「子ども村」で研修 昼食後自由時間
12月19日(火)	カンチャナブリからバンコクへの帰路、 ボートによる水上マーケット 仏教寺院ナコンパトム バンコクに戻り、暁の寺院と王宮
12月20日(水)	タイ国立老人ホーム「バンケイ」で研修 研修打ち上げパーティ
12月21日(木)	タイ航空でバンコク発成田着

表5 バングラデシュ・タイ研修の二次的研修の場と機会

研修目的	研修の場と機会
宗教	イスラム教の断食月（バングラデシュ） ヒンズー教寺院（バングラデシュ） ナコンパトム（仏教寺院、タイ）
市場（市民生活）	大規模市場「ニューマーケット」の生鮮食品売場など（バングラデシュ） 水上マーケット「ダムナンサドワーク」（タイ）
歴史	バングラデシュ国立博物館 マイナマテ仏教遺跡（世界遺産）と博物館（バングラデシュ） カンチャンブリの戦争博物館（タイ）
ホームヴィジット	ダッカ（バングラデシュ首都）においてブイヤン夫妻宅（全員夕食招待） コミラ（インド国境の町）においてドロニー夫人宅（休憩と敷地内散歩）
交通	リパークルーシング（貸切り、バングラデシュ） ブリガンガの河川港の見学（バングラデシュ） リキシャ（バングラデシュ） 水上バス（貸切り、タイ） タイ風モーターボート 列車（旧泰緬鉄道、現在は通常の移動手段、休日は観光用車両を増結、タイ）
政治	チョードリー農業大臣（バングラデシュ）との会見と一問一答
講義	現地の人（モンターズ・ブイヤン氏）の日本語による講義
日本への関心	成人日本語学校（ダッカ）

一方バングラデシュであるが、旧日本軍のインパール作戦の目的地は当時の英国領インドで、現バングラデシュのインド国境コミラ県のマイナマテ戦没者墓地に、終戦を前に命果てた日本兵が連合軍兵士とともに眠っている。早朝にダッカを出発しコミラに向かったが、NGOの協力でフィールド研修をし、仏教遺跡を訪れ、墓地に着いた時は日没後で門

は閉ざされていた。墓守りに頼んで錠を外してもらった。平和で経済的に豊かな時代に育った日本の若者であるが、胸で手を合わせる姿が見られた。

この日は参加学生の一人の20歳の誕生日である。ダッカに帰り着いたのは夜半になっていたが、薔薇とハッピーバースデーの歌で祝った。戦争は絶対にくり返してはならない。若

者に「生」を大切にしてもらいたい(注4)。

社会構造の総体を把握する

社会構造の仕組みを、総体として知る学習は容易ではない。例えば、女性大臣とストリートチルドレンの少女に会えば、その一端をかいま見ることができる。事実を確認し、それを積み上げ、予習による情報がつなぎとなる。

農業大臣に学生全員が会う機会を設けた(12月13日)。チョードリ大臣は、「炎の女」と呼ばれる筋金入りの政治家である。人口の2/3が農業に携わり、女性の社会進出が思うに任せないイスラム社会で、女性大臣の為政者としての姿勢を知るとは意義がある。ちなみに大臣のうち首相、環境、農業の3人が女性である。書類の提出など手続きが厳しかったが、長年の知人の仲介で実現した。「土地なし農民」、「水の砒素汚染」、「女性の地位向上」に関する学生の質問に対して、大臣から丁寧な説明を受けた。

今回は児童労働と教育の関係を研修する機会を2カ所で作った。ストリートチルドレンがNGOで初等教育を受け、さらに職業教育によって、経済的に自立していく様は教育の輝きを目の当りにしたと思う(UCEP)。また幼くしてメイドなどとして働く子どもに空き時間を利用して数時間の教育をするNGO本部を訪れ、その後、学習の場を訪問したのは、最初の研修だった(Shoishab)。そこで子どもたちに「頑張ってるね」と声を掛けた学生がいたが、親が恋しい年頃に親から離れ、奉公している「おしん」に、経済大国の若者が、それ以上何を頑張れというのか。善意であっても、傲慢で残酷である。相手の立場を慮るのは容易ではない。

農政を舵取りする女性と、極貧の土地なし農家に生まれ都会で奉公する少女の話を経験的に考える力を学生が持っているなら、これだけでもこの研修に参加した意義がある。

4 総合的に思考する(注5)

対比し思考する

総合的多面的に思考する最初のステップは

対比で、相違点と共通点を発見することである。前述のように女性大臣と極貧農家の少女を対比することができる。第2次世界大戦中のインパール作戦のスタート地点と最終地を対比する。戦争と平和。イスラム教、ヒンズー教、仏教。S A A R CのバングラデシュとA S E A Nのタイ。両国における男女の関係。バングラデシュとタイの都会と地方。バングラデシュの輸出用の縫製工場と伝統的な手織り工場。一握りの金持ちと多数の貧者。バングラデシュそしてタイの貧困。道路交通と河川交通。タイにおける支援が必要な子どもと高齢者。

対比のための機会を十分に準備しているので、構えががっかりしていれば、総合的に思考する能力が磨かれるはずである。逆なら単なる情報の収集に終始し、不幸な場合は興味がないのでつまらないということになる。

次善の策が道を開くことを実感する

all or nothingまたは二者択一の単純思考ではなく、緻密な段階的な解決策が人間生活を豊かにする。「子どもの権利条約」によれば児童労働は禁止されており、先進国の人間は、児童労働が好ましい現象であるとは考えない。しかし自分の生計を立てている子どもや、子どもの収入を家族が期待している場合、児童労働を禁止すればどうなるか。アメリカが、縫製工場で15歳以下の子どもを雇用しているという理由で、バングラデシュ製品の不買運動を起こしたことがある。工場側は子どもを解雇し、収入源を絶たれた子どもは良識ある大人の目の届かない、売春などの苛酷な環境に追いやられたという事件があった。禁止するだけでは解決にならない。

義務教育を保障すべき、児童労働を禁止すべきだという「べき」だけでは問題は解決しない。目標である義務教育を保障し、児童労働から子どもを解放する「次善の策」を講じなければならない。融通性と寛容さの価値の再発見である。

学校の建物を造って、机と椅子、教科書と文房具を用意すれば、子どもの教育が保障さ

れるわけではない。急がば回れ、労働しながらでも教育の機会を与えれば、貧困の鎖による呪縛から解放される。初等教育に力を入れるNGO、女子が教育の場に参入するための方策、food for educationの試み、貧困家庭の子どもへの奨学金などの話から「急がば回れの策」の多くを学んだはずである。

総合的な思考を養う

a) 縫製業の隆盛と伝統的な織物から産業の総合性を学ぶ

バングラデシュの外貨の稼ぎ頭は縫製業であるので、大規模な縫製工場の見学を入れた。以前の輸出製品の筆頭はジュート（数年前に見学を入れた）だったが、不振が続き、国営なので存続しているが、民間ならとくに倒産している。縫製工場に導入されている機械器具を見れば、バングラデシュと外国との関係がわかる。産業が乏しいこの国で、労働力を吸収できる大型企業の出現は、継続的に賃金が払われるから労働者と家族に安定した生活をもたらすという関係を確認できる。見学した縫製工場の共同出資者の男性は、日本のレストランでシェフとして貯めた賃金をバングラデシュに持ち帰り、南北格差を逆手に取った実業家である。のどかな田園地帯にそびえる大規模工場は異様であるが、経済的に成長する時期は、なりふり構わずといったマイナス面が伴う。

しかも縫製工場がもたらした利点は、家の中に閉じ込められていた女性たちを労働の場に招き入れ、男性に経済を依存していた女性が自ら賃金を得ることによって自立と自信を得た成果は大きい。イスラム教という大義名分があっても、国民の半数を占める女性を神隠しのような状態において、国も社会も発展しない。

機械化の潮流の中で、手工芸的産業は衰退しがちで、伝統をいかに守るかが大きな課題である。リパークルージングの時に家内工業的な伝統的手織物工場の見学を入れたのは、機械化と伝統について対比してもらったからである。バングラデシュがインドのベ

ンガル州として英国の植民地であった時代に、ダッカモスリン（蝉の羽のように薄い芸術的高品質の織物）を織る職人の技術に、英国人は嫉妬し、織物職人の指を切断し、この織物を抹殺したという過去がある。ベンガル人は言い伝えているが、加害者の英国の人は忘れていている。一枚の布から、歴史も見えてくる。b) 都会のリキシャマンと農村の貧困から経済の総合性を学ぶ

リキシャの試乗を取り入れたのは、機械文明の代表「自動車」と無公害な移動手段「リキシャ」を体験的に対比してもらいたかったからである。リキシャは環境に優しい乗り物であるが、首都ダッカの凄まじい交通渋滞の原因はリキシャで、自動車に混在するからである。都心からリキシャを排除すれば自動車をを使う人は快適に移動できる。しかしリキシャ産業はダッカだけでも200万人以上の労働市場で、彼らの労働の機会を奪ってしまう結果になる。しかもリキシャマンの大半は農村出身者で、都市と農村の間には経済格差があり、土地なし農民は都会へ流入する。農村の貧困を解決しなければ、都市の渋滞は悪化するという関係にある。

農村の最貧層に関しては、今回NGOのSwanirvarの協力を得て、職業開発とマイクロクレジットの関係を研修したが（前回まではBRACバングラデシュ農村振興委員会やグラミンバンクなど）農村で生活できれば、なにも都会に出稼ぎに来て、苛酷な労働をしなくてよい。既述した児童労働やストリートチルドレンの問題も、源をたどれば農村では大人も食べられないことが原因なのである。

伝統的芸術的なジャブダニサリーの図柄を思い出し、リキシャの心地好い揺れの感覚を体が覚えていたら、総合的な思考が大切であるという意味が理解できるだろう。

5 日本を知り、自分を知る機会

可能性と限界を知る研修でもある。自分や日本が置かれている立場を知るのは容易ではない。敷かれたレールの上をひたすら走るこ

とを強いられていたら、このルールが間違っていたら、あるいは途中で途絶えていたらなどと考える余裕すらないかもしれない。

社会通念や固定観念の単純図式を見直す
経済大国とは何を意味するかは、一人当たりのGNP額ばかりではない。

例えば、「経済大国で援助国」の日本と「最貧国」のバングラデシュという関係にのみ注目すれば、柔軟な思考に枠がはめられる。家内労働の子どものための教育に携わるShoishabや初等教育と職業教育のUCEPで、ドナ - として北欧諸国や英国の組織名は出たが、経済大国日本が含まれないことに気づき、日本の国際協力やODAのあり方について疑問を抱いたのだろうか。カンチャナブリの戦争博物館（Jeath Museum）の敷地で「20パーツ以下は金じゃねえ」と大声を上げていた男性日本人観光客が、「経済大国」日本の悪しき象徴かもしれない。

バングラデシュの子どもの笑顔がすばらしいと異口同音に言うが、日本のように金持ちでなければ、皆が暗い、悲しい、哀れな表情をしているはずだという思い込みもおかしい。人生にも生活にも喜怒哀楽はある。金持ちは幸福で、貧者は不幸という単純な図式に自分をはめ込んでいるからである。バングラデシュの絶対的貧困家庭出身の子どもに初等教育や医療が必要であるという問題はあがるが、経済大国にいながら無気力、無関心、無感動になっていたたり、暴力に訴える日本の子どもも問題なのである。

貧しいという枕詞がつく国に関して、金持ちが貧者を搾取し、政治家は貧者を見捨てて権力にしがみついているという考えをする人がいる。そのような側面は否定できないにしても、そんなに単純な構造ではない。極貧の人びとにとって、栄養、教育、医療、職業開発などの条件を充足し、QOLの向上に何が大切か重構造を見極めなければならない。都市や農村のNGO活動や大臣との会見をスケジュールに入れたのは、勤善懲悪の固定観念にとらわれていたら、開発の質的な面が見え

ないからである。これらの単純図式（社会通念、固定観念）では計れない尺度のほうが多いことに気付いてほしい。

自分に対して責任をもつ（注6）

自分を知るということでは、14日間に渡って研修が滞りなく継続するために、健康と安全の自己管理を徹底しなければならない。事前指導でも、現地でする場に応じて、スリや置き引きから身を守るためにハンドバックの掛け方やナップザックの扱い、不衛生と考えられる飲食物の制限、脱水を防ぐための水分補給など注意を促すが、最終的には個人の責任である。誰か具合が悪くなったり、仮に犯罪の被害に遭ったら、引率はその学生を放置するわけにもいかず、研修全体にも悪影響を及ぼすのである。自分を知り、社会を知るのは容易ではないが、むずかしいことを自覚できたら進歩である。

6 異文化社会にふれる

宗教と生活の関連

途上国では宗教が生活を律する傾向が強い。研修中バングラデシュは断食月（ラマダン）に当たり、研修上は不便であったが、結果的にイスラム教にふれる貴重な機会になった。一方バングラデシュではヒンズー教徒は少数派であるが、ヒンズー教寺院を訪れるようにした。

タイは仏教国である。カンチャナブリからの帰路、ナコンパトム寺院に寄ったのは、国内最大の仏塔があるだけでなく、普段着の仏教に接してほしかったからである。ところで家族の絆が強いこの国で老人ホームを利用する人は、身寄りがなく、葬儀はホームで出す人も多い。バンコクで研修に訪れたバンケイ老人ホームには、敷地内に遺灰を集めた小さな仏塔があり、手を合わせる入所者が多い。死生観は宗教によって異なる。

開発と生活の実態

2日間に渡って個人ではたどり着けないバングラデシュの田舎にまで足を運んだ。マイクロクレジットと職業開発、保健と家族計画

などの研修が主たる目的であるが、素朴な生活の実態に接し、開発と生活に関して考える素材を提供するのが大きな狙いでもある。クルージングによって河から沿岸を見た日があったが、煉瓦（乾季の仕事。この国には岩石がほとんどないため煉瓦は建築資材として重要）を焼く煙や黄金の絨毯を敷き詰めたとような菜の花畑（マスタードオイルの原料）にも生活が感じられる。

ホームヴィジットのぬくもり

知人の厚意に甘えて、ホームヴィジットを取り入れている。ダッカのブイアン氏のように産業（水産会社）を興し、多数を雇用し経済活動を活発にしている人もいるし、コミラのドローニー夫人のように数奇な運命をたどって、東インド会社の歴史を今に伝える人もいる。日本では予想もつかない生活である。富と貧しさの単一の尺度では測れない。

河川に大型船、陸にリキシャ

バングラデシュを縦横無尽に大小の河川が覆っている。大型船がひしめく河川港の賑わいから、公共輸送手段は電車やバスだけではないことを知ってもらいたかった。ダッカに到着直後で、しかも断食が明けの日没前の時間と重なり、凄まじい渋滞に巻き込まれ、車窓から見る光景にカルチャーショックを受けた学生も多かったようである。リキシャが一般市民の移動手段であることが車窓からもわかったはずである。金持ちは乗用車をもち、多くはドライバーを雇用している。子どもの学校の送迎なども自家用車で、バス（女性は運転手近くの指定席に座る）やリキシャは使わない。実際に河川港から大型船で大河を旅するのは無理であるが、模擬的にリバークルージング（貸切り）を試みている。

タイのカンチャナブリでは列車（旧泰緬鉄道）から見たサトウキビ畑や、バンコクの水上バスから見たチャオプラヤ沿岸の光景も、研修の副産物である。

バングラの「市場」は、売る人も買う人も男性

市場に足を運べば、食糧事情を通して生活

が見えてくる。ダッカではニューマ-ケットを訪れた。市場での自由時間が少ないと文句を言う学生もいたが、慢性的交通渋滞という移動の悪条件に加え、広大な敷地の市場の中で、生活に関連する生鮮食料品、穀類、香辛料などを見るだけでも大変である。しかも買物が男性の仕事で、売り手も男性で、その中をジーパンにシャツ姿の外国人女性は目立つし、迷子にしないだけでもひと苦労である。親の心、子知らずである。

タイでは、生活の香りが残り、観光資源でもある地方の水上マーケットに寄った。モーターボートによる運河巡りで、いくぶんかは生活にふれることができただろう。

7 時間的空間的な絆が培ってきた研修

学内に研修の旅行業者を入札で決めるようにという動きがある。バングラデシュなんかには学生を連れて行くなという批判が未だにある。

勇気は無謀とは異なる。万全の準備が結実へと導く。研修先、宿泊、日程、現地のガイドと通訳など研修が順調に進行するように私を手配し、学生指導を奥田先生と共に行う。航空券の確保、ヴィザの申請、旅行代金の支払い、添乗員（指名）の派遣などを旅行業者に依頼する。私がコーディネーターの役割を果たし、業者任せにしない研修であると自負している。旅行会社の営業および添乗のスタッフは研修の趣旨を尊重してくれ、大学のバングラデシュにおける研修が珍しい存在であった頃から、共に研修を構築してきた。

バングラデシュなんかという頭の固い大人には期待できない。相手を知りもしないで「なんか」という優越感を抱いくようでは、だれとも対等な人間関係も保てず、総合的な思考もできない。次代を担う若い世代に賭けるのである。安全と清潔、健康維持など細かな配慮まで、準備は容易ではないが、この研修には豊かな人格の持ち主たちの人脈が息づいている。この研修を継続できたのは、毎年研修の主人公である学生の参加が途切れなかつ

たという要因が大きいですが、現地の人びとの無償のサポートが得られたからである。

バングラデシュ現地旅行代理店のスタッフとは10年来の付き合いで、安心して研修を任せることができる。観光産業が国を発展させ、国際交流を深めるという立場に立つ。半世紀に渡って地方の貧困者に衣類を送り続ける医師に便乗して、日本から持参する冬物衣料を渡してもらっている。1枚のセーターは、1人の人に冬（亜熱帯とはいえ温度が下がる）に暖かさを送るだけではなく、雨季の農作業の時も身を守ってくれる。

ブイアン夫妻は、毎回、多数の学生を夕食に招待して下さり、バングラデシュに関する講義、成人日本語学校の見学など、初回以来世話になっている。日本の公使在任中からの知人で前スペイン大使には、農業大臣への会見に力添えをいただき、フィールド研修の場Swanirvarを紹介下さり、下準備のとき本部に私に同行し、細かな打合せにも同席していただいた。類は友を呼ぶ。すばらしい人は、次のすばらしい出会いをつくってくれる。

例えば、事前打合せで事務所でお会いしたチョードリ氏は、Swanirvarとともに歩んだ方である。今回は断食中にもかかわらず、研修に全面的に協力し、フィールドに同行し、説明を加え、雰囲気のを和ませ、研修を実りあるものにしていただいた。純粋にボランティアである。大人世代は、これまで築いてきたものを次世代に手渡す責任があるという点で、私と意見は一致する。彼も若者に賭けている。国境を越えて同士を得た感がある。

インド国境の町コミラではスケジュールが厳しいので、精神的、身体的に休憩が必要である。知人の家（植物園のような広大な敷地と2つの大きな池、^{やかた}館風の家屋）は安らぎを与えてくれる。毎年のドロニー夫人の厚意と笑顔の出迎えが嬉しい。10年ほど前に私が彼女の家に最初に訪れたときは、大河を渡すフェリーを乗り継ぎ、早朝にダッカを出ても、コミラ到着は午後になっていたが、今では橋が完成し、3時間で首都を結ぶ。時代は変わっ

たが、彼女の優しさは変わらない。

このように研修は、現地の人びとの善意に支えられている。マイクロクレジットの現場を見せるために多忙な時間を割いて集まってくださった村人や、NGO関係者など多くの人が研修に協力して下さった。研修先のガジプールで手渡された白い花口ジュニゴントアと、ダウドカンディでいただいた深紅の薔薇にも協力者の優しさが籠っている。

学生指導に熱意を傾ける奥田先生、研修に参加する学生の相談に応じ、書類の作成や事前指導などに力を惜しむことない国際交流室スタッフなどの協力もありがたい。私が退いた後、この研修がなんらかの形で発展、充実することを望む。

3 北欧福祉・教育研修の実態

（第9回北欧福祉・教育研修レポート集からの抜粋および加筆）

1 日本で受け取る参加者メンバーからの便り（注7）

研修レポートの冒頭に私が寄せた前文である。

「研修参加メンバーから大判の絵葉書が届いていますか。研修と旅の雰囲気載せてくれているでしょう（注6）。絵葉書にある写真の手前は、皆さんが最初に訪れた市庁舎で、ストックホルムに関する地方政治の場です。その後ろが旧市街で、四角い王宮も半円形の国会（立法府は一院制で、国会議員は349名。女性議員が43%）も見えます。旧市街と右手の南の島を結ぶ地点がSULLUSEN（NACKAの街づくりの調査に行くときに、地下鉄からバスに乗り換えた駅）です。スルスULLUSは「堰（せき）」です。写真右手がメーラレン湖で、堰止められた向こうがバルト海です。私たちがヘルシンキから乗ってきた大型フェリーのバイキングラインが停泊しているのも、小さく写っています。それを海岸沿いにたどって、明るく輝いている付近がNACKAです。

表6 北欧福祉・教育研修の目的および場の一覧

研 修 目 的		研 修 の 場
学 校 教 育	就学前教育（旧保育園）	Speldosa就学前学校（Tyreso） 「オルゴール」の意味
		Klinton就学前学校（両親による共同組合方式） TOP OF HILL の意味
	基礎学校（小学校）	Jalapuiston学校（Finland）（ ）
		Bergsfoten学校（Tyreso） 「山の麓」の意味
	知的障害など障害児教育	Jalapuiston学校の障害児学級（Finland）
		Stimmet障害児学校（Tyreso） 「魚の群れ」の意味
大学教育と専門職養成		Ersta大学のソーシャル・ワーカー（社会福祉士）養成 スウェーデン教会系列のSkondal（「美しき谷」の意味）財団の大学
教育行政（中央）		教育庁（国の機関）での講義「教育政策と制度」
身体障害（運動機能障害）者の 当事者活動と自立生活		当事者活動団体DHR （De Handikappades障害者 Riks全国 Organisation組織）
		自立生活を支援するホームヘルプとバリアフリー住宅の実際
高齢者の福祉サービス （福祉行政のサービスの実際）		Tyresoコミュニティの高齢福祉課での講義 「高齢者の動態とサービスの対応」
		居住形態別福祉サービスの現状（Tyreso） 地域サービス／年金生活アパート／痴呆老人のグループホーム 老人ホーム／ホームヘルプ／食事サービス／警報システム
人間に優しい町の構造		福祉の街づくり（Nackaにおける調査）

（ ）このJalapuiston学校のみがFinlandで、他は全てSwedenにおける研修

表7 北欧福祉・教育研修の日程と研修内容の関係
(2001年2月15日～2月26日)

月日(曜日)	スケジュール
2月15日(木)	SASにて、成田発コペンハーゲン経由、ヘルシンキ着
2月16日(金)	午前 ヘルシンキ市内の視察
	午後 Jalapuiiston小学校 普通学級・英語による教育の学級・知的障害児の学級
2月17日(土)	夕刻のバイキングラインに乗船。ヘルシンキ出発
2月18日(日)	バイキングラインでストックホルムに到着 ストックホルム市内の視察と滞在中のオリエンテーション
2月19日(月)	午前 Bergsfoten基礎学級(Teresoコミュニティ) 小学部・ゼロ年(6歳児)学級
	午後 Stimmet学校(Teresoコミュニティ) 知的障害などの障害児学校
2月20日(火)	午前 Speldosa就学前学校(旧保育園、Tyresoコミュニティ) 公立の就学前学校 (移動) Klinten就学前学校(旧保育園、Tyresoコミュニティ) 協同組合方式(両親)によるモンテッソーリ教育保育園
	午後 Ersta大学(StockholmのFarsta) スウェーデン教会系列のSkondal財団の大学、SW養成の現状
2月21日(水)	『福祉の街づくり』 Nackaにおける調査
2月22日(木)	午前 教育庁での講義(Stockholmの中心部) 学校教育および成人教育に関する政策と制度
	午後 障害者の当事者団体DHR(Solnaコミュニティ) 「社会サービス法」および「個人サービス法」()と障害者の権利 (移動) 障害者の自立生活とバリアフリー住宅の見学
2月23日(金)	午前 Tyresoコミュニティ高齢福祉課での講義 コミュニティの高齢者の動態とサービスの実際
	午後 Tyresoコミュニティの高齢者サービス 地域サービス・年金生活者アパート・痴呆老人のグループホーム (食事サービス・緊急警報システムなどを含む)
2月24日(土)	自由行動と資料整理
2月25日(日)	SASにて、成田発コペンハーゲン経由、
2月26日(月)	成田着

() 「特定の機能障害をもつ人に対するサポートとサービスに関する法律 LSS」

その先が研修で3日通ったコミュニンTYRES 0”ですが、写っていません。- 中略 - 写真の左手が中央駅で、旧市街を結ぶ橋は、バスでよく通りました。王宮の向こうに国立博物館や現代美術館、そのまた向こうにヴァサー号博物館や世界最初の野外博物館であるスカンセンまで写っています。緑（冬枯れの木立ちでしたが）と水の自然の中に町があるという感じですね。」

以下研修に関する文章を抜粋、加筆していく。

2 北欧を通して日本社会を顧みる

北国スウェーデン（北緯55°20' ~ 69°45'）は、国土は日本の1.2倍あり、人口は890万人に少し足りないの、国の行政機関である教育庁で話に出ているように、北の過疎と南の人口集中など地域差がある。少ない人口（稼働年齢の間は、男女共に働いても）で、広い国土の隅々まで良質の道路を通し、自然を商業主義の餌食にしないで保護し、しかも「自然へのアクセス権」を万人に保証し、羨ましくなるような社会保障制度と地域密着タイプの福祉サービスを、必要とする全国民に提供している。労働時間は適度に押さえられ、有給休暇も育児に関する休業も保証されている。

フィンランドは省略するが、世界の大国「日本」に住む若者にとって、この研修は北欧の精神的かつ物質的（住居を見ても分かる）豊かさを、生活重視の点から学ぶ良い機会だと思う。人間科学部の学生にも開かれている「バングラデシュ・タイ研修」にも参加すれば、北と南の国を結ぶ線が見えて、日本と世界の関係も分かり、思い上がりや傲慢さ、「井の中の蛙」的発想を見直す機会にもなるだろう。

赤道近くでは戸外で寝ていても死にはしないが、北極圏を含む北国の冬は死と隣合わせである。北の人びとが現在の福祉国家を築き上げ、連帯においてサポートの必要な人や年代を支えるのは、気候との関連も大きい。社会で「生老病死」を解決するために税制度を

通して、国（年金や休業に伴う社会保障）、県（医療）、コミュニン（教育と福祉を含む生活サービス）が、税制度により富の再配分を厳密に行い、国民生活に反映させている。

研修期間の前半は小春日和で、北緯60°の冬とは思えなかったが、後半は零下10°まで下がり、北欧の社会福祉の原点に立てて天候に感謝した。オリエンテーションで指示した服装（底のしっかりした靴、フード、手袋の3点セット）を全員が整えて研修に参加したし、ホテルと地下鉄の駅が近接し、ホテルの下がスーパーになっているという便宜を考慮したのは、冬期の寒さのみならず時間が大切な研修にとっても最高の条件だと思う。

3 総合的な見地から福祉と教育を考える

研修参加の学生全員が、互いに思いやりをもちながら昼は研修のスケジュールをきちんとこなし、夜は遅くまでレポートを作成し、わずかな自由時間を精一杯活用する姿に、若人の両肩に期待できる実感を得た。

研修の最終日に訪れた TYRESÖ の年金生活者マンションで、何歳ですか？という質問に nitti fyra（94歳）という答えが聞き間違えではないかと思うほど若々しい ISAMUEL-SOON・Rさんが学生たちに言った「年を重ねるっていいことよ」という言葉はあまりに印象的で、スウェーデン（北欧）社会を象徴していると思われる。生きていてよかったと思える社会を築くことが、次の世代に期待されている。

まさに揺りかごから墓場まで、生きるプロセスを追う研修を計画した。人生に不可欠なサポートが制度に位置づけられ、サービスとして滞りなく提供されることが、人間が生きていく上で大切である。自立した人間を育み（教育）、必要な手は惜しみなく差し伸べる（社会福祉）状況を、耳で、目で、思考で、情緒で確認できただろう。

社会福祉を知るために、障害者や高齢者の福祉サービスについて勉強しても理解できる

ことわずかである。福祉は社会の意識を反映する。とくに教育の意義が大きい。就学前学校（1998年以前は保育園）を見学したが、SPELDOSAの可愛らしい子どもたちも、10数年経てば、納税者として社会を支える成人になるように、就学前教育がなされるわけである。子どもは幼くても学習する存在で、今回は見学できなかったが、高齢者の学習の機会も豊富で（教育庁で生涯学習の話でふれられた）人間は一生学習する存在である。

4 基礎教育、大学教育そして社会福祉の連続性

まずはフィンランドの小学校で、学生は障害児教育も普通教育も、そのあり方に衝撃を受けたが、スウェーデンの研修初日のBERGSFOTEN 基礎学校の小学部で、あまりに日本と違う教育の概念や教室の環境、そして教師の役割に、戸惑う学生が多かったようである。「学校嫌いの子」「不登校児」がいない理由が漠然とでも理解できただろう。人間科学科の心理学コースや臨床心理学科の学生もかなり参加しているが、スウェーデンでは一般校でも教師と心理士や保健婦との連携は当然である。STIMMET 障害児学校では、さらに理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語療法士（ST）など、教師以外にも教育に携わる職種は多く、専門家間の円滑なチームワークが注目に値した。

高等学校で職業準備教育が徹底しているが、高度の専門職の養成は大学である。福祉先進国を支えるソーシャルワーカーもしかりで、ERSTA 大学で、社会福祉士（ソーシャルワーカー SW）の養成について今回も講義を受けた。入学の条件は大学入試がないスウェーデンなので、高校の成績も関係するが、それまでに人間相手の職業に就いた経験をもつという条件が大きいと聞いて、驚いた研修参加学生も多かったようである。SWは福祉的ニーズのある人びとに接する職業で、対人関係の構築とコミュニケーションが大切である。10倍近い難関を潜って、小人数で専門を学び、

4年間のうち、通算して1年ほどが実習に当てられ、卒業すれば、国家試験などなくソーシャルワーカーとして働ける人材が養成されている。大学が社会から信用される教育を行っている証拠である。

基礎学校8年（中学校2年）ではじめて、数値で成績表が渡され、高校進学も、大学進学も入学試験がなく、本人の希望と日頃の勉強の状態、進路が決まるのであるから、SWや医師に国家試験がなくても不思議はない。

肝心の社会福祉サービスの研修であるが、児童関係では保育園が学校に移行し、障害者や高齢者は、大半が「自宅」に住み、必要ならホームヘルプサービスを受け、大型入所施設は皆無なので、社会福祉現場の見学や研修はむずかしい。暮らしの器である住まいに土足で入ることを恥じながら、無理を承知で、見学を申し入れたのは、参加学生が研修成果を一人占めしないで、社会を建設する一員として21世紀に役立ててくれることを望むからである。スウェーデンで最初（1986年）にできたハンベルスベーゲン年金生活者アパートが見学できたのは幸いである。バリアフリーの住宅と、生活に必要なホームヘルプの組合せ、そして年金と、住宅手当の経済的裏づけの様子が総合的に理解できたと思う。ホームヘルプも身辺の世話だけでなく、水泳や体操教室への介助、会合や散歩の同行など普通の生活へのサポートが含まれ、ノーマライゼーションの意味が実感できたはずである。

障害者の自宅の見学は困難を極めたが、普通の生活や人権に関して当事者団体であるDHR（全国身体障害者組織）で伺った話が、現実に見えたはずである。この研修に参加した学生が、福祉や教育はもちろん人間相手の仕事に携わったときに、人間の管理者ではなく、普通の生活を応援するワーカーや支援者になるように期待する。

学生に対して欲をいえば、予習をきちんとやって研修に参加してもらいたい。せつかくオリエンテーションで渡して説明をしておいた「社会サービス法」と「特定の機能障害を

もつ人に対するサポートとサービスに関する法律（通称LSS）」の資料（日本語の要点を添付）を予習してない人や忘却の彼方の人が多いことである。予習と復習をきちんとやれば、研修は自分の糧となる。

5 話を聞き、自分で確かめる研修

講義を聴く：教育庁での講義は生涯教育を含む教育制度全体を理解する、SW養成大学での講義は社会福祉専門家養成の意義と方法を知る、DHRは当事者団体の活動と社会への影響力の把握する、TYRESÖの高齢課での講義は高齢者福祉サービスの行政を総合的に理解する、こんな目的で講義をしていただいたが、見聞した現象を理論的に肉付けするためである。

自分で確認する：教えられたことを忠実に学ぶと同時に、観察し総合的に判断することも学習の重要な要素である。DHRで誰もが住みやすい社会を目指す大切さを伺ったが、制度やサービスのみならず町の構造も大切である。研修中日にNACKA FORUMを路線バスを使って独自に調査してくる課題が与えられた。社会保険事務所や職業安定所までは気づかなかったようであるが、バリアフリーの構造と生活に必要な機能の大半が分かって、「人間に優しい町づくり」が実感できれば、課題の目的の90%は達成できたといえる。スウェーデンは福祉社会であるからNACKAと同様の町は大小さまざまあるが、NACKAは全体的な構造が分かりやすく、旅行者は敬遠しがちな公共の乗物であるバスに乗る機会にもなるので選んだ。バスも赤ちゃん連れやお年寄りなどが使いやすい構造になっていたことに気づいたのであろう。公共輸送機関の充実も生活のためには欠かせない。

自分で調べ、質問して問題解決をする：限られた時間を有効に使うように、事前に情報は提供し（注8）、現地で、質問に対してはできる限り答えるようにした。なかには即答できない質問もある。例えばスウェーデンの年金制度の質問があったが、現在は新制度

への切り替えの時期ですぐには答えられなかった。帰国後調べて日本語でレポート集の最後に挿入した（本紀要では諸略）。学生のみならず教員にも宿題が残る。

芸術を堪能する：北欧の文化は高く、国が文化を保護し、手頃な料金（低料金で、しかも税制上の優遇措置がある）で音楽などの芸術を楽しむ。音楽、演劇、美術などのできる限り接するように勤めている。事前に滞在中のオペラやコンサートのプログラムは調べて日本語で一覧表にし、オリエンテーションで渡し、関心のあるオペラやコンサートに関しては、調べておいたほうがいと助言しておいた（注9）。帰国する前夜に、見てきた「フィガロの結婚」のストーリーを質問する学生がいた。最高傑作と言われるオペラの筋書きは簡単ではないが、A4版1枚にまとめて、帰国日の朝、全員に渡した。海外研修は研修と旅とのコンビネーションで、研修の部分は引率教員として最大限指導する努力するが、旅の部分は、学生自身が実りあるようにしてほしい。

食文化を味わう：食べ物が口にあわず、英語すら自由に使えず、二重苦の学生もいた（注10）。研修中は優秀な現地語の通訳に依頼している。個人的な用件を処理するにはせめて国際語の英語力をつけてほしい。ところで食事は、夕食はほとんど自己調達であるが、研修中は学校給食や老人センター（家庭の味に近い）の食事を試食する機会があり、3万5千セのバイキングラインで本場のバイキング料理を味わう体験もした。昼の時間に余裕があり、地理的条件もよい場合は、案内をしたうえで現金支給方式をとったが、昼食を重んじる北欧のこと、DAGENS LUNCH（サービスランチ）は充実し、値段も手頃で、北欧の昼食の楽しみ方にも接しただろう。バック旅行では無理な「食文化の旅」も実践していたのである。

6 社会を総合的構造的に見る力

大臣の半数以上が女性であることに象徴さ

れるように男女が共に働く社会、組織力抜群のLO（ブルーカラーの労働組合）と社会民主党（ちなみに党首は当時EU議長）の関係、自動車製造VOLVO や通信機器ERICSSONに代表される強い経済力、しかも国営企業SAMHALLの障害者雇用に見られるように経済的自立へのサポート、年間5週間の有給休暇や1人の子どもに450日の育児休業、生活できる年金、低所得層に対する住宅補助、16歳以下の子ども全員に対する児童手当など、教育も福祉も、総合的な社会的背景の中で生活の質QOLとの関連で考えなければならない。

世界のオンブズマンのモデル「国会オンブズマン（通称JO）」に見られるように、自由と権利を守る方策と手順がきわめて明確な国であるという事実も忘れてはならない。政府任命の5オンブズマンのうち、教育や福祉に携わるものが関心を抱く「男女機会均等」、「児童」そして「障害者」の3つが含まれている。

短い期間に、いかに効率的に研修を組んでも、背景まで見渡すのは難しいが、「年をとることはいいことよ」という百歳近い女性の言葉も、毎日10時間以上、4人のヘルパーに「普通の生活」をサポートされバリアフリーの家に住む中年男性の生活も、政治、経済、労働、余暇、利潤の再配分と税制度、社会保障、自立の尊重とサポートなど多面的な要素が複合して生み出された結果である。社会を総合的に構造的に見る努力をしてほしい。

4 まとめ

人間科学部が実施してきた福祉・教育海外研修は今年で10回目となり、研修の場は北欧である。一方、5学部が開かれているバングラデシュ・タイ研修は7回目となるはずである。両研修のこれまでの足跡をたどり、海外研修の意義と指導を報告した。両研修に共通する目的は、次代を担う世代が、海外研修を通して健全な世界観を構築することである。福祉は安寧を意味するが、広義の福祉活動を

経験することによって、進むべき方向を見極める機会になることを望んでいる。

福祉・教育海外研修の目的は、ノーマラーゼーションの原理の具現化と方法を学習することにある。社会福祉のニーズを有する人間が社会において平等の地位を獲得し、社会参加するために、教育の果たす役割は大きいと考えるので、学校教育について研修する機会を大切にしている。研修の場（2000年度）は、就学前学校、基礎学校、障害児学校、大学におけるソーシャル・ワーカーの養成大学、教育行政機関、障害者による当事者団体と自立生活、高齢者の福祉サービスの行政と実際、福祉の街づくり、となっている。

一方、バングラデシュ・タイ海外研修は、開発と生活の関係について、総合的多面的に学習する。この研修では、第2次世界大戦の日本についての記録を残すタイとバングラデシュの両国で平和学習が継続的に実施されてきている。宗教、歴史、政治の他、市民生活を知るために市場、交通、ホームヴィジットなどに接する機会を毎年設けている。そして昨年（2000年度）は、直接的研修として、バングラデシュでは労働に焦点を合わせて、都市における児童労働、農村における土地なし農民の職業開発に関して研修した。タイでは、保護の必要な子どもと高齢者について学習するために、児童養護施設と老人ホームを訪れた。

平和・安寧・普通の生活を、両研修は追求してきている。

海外研修を開始し10年が経過するが、十年一昔で、ベルリンの壁崩壊以来の動きに象徴されるように世界は変容し、欧州はEU絡みで各国の色彩が薄れていくようである。研修で訪れているフィンランドも来年2002年から通貨の単位はマルカからユーロに切り替えられる。先進国と途上国との関係もODAに象徴されるように変化してきた。自身の専門からすると、最近では国際福祉という領域が確立しつつあり、社会福祉も国境を越えて活用されるようになってきている（注11）。

海外研修担当を退くことによって、若人たちと体験を共有する機会がなくなるし、研究を教育に還元する楽しみもなくなる。今後は研究者として、インド国境に落ちるガンジスの夕日を眺め、開発の真髄を探求し、北極圏に近い厳寒の地で、障害者のノーマライゼーションの実態をつぶさに分析考察したい。

- 注1 北欧福祉・教育研修も同様で、研修に関する内容と旅の心得に2分される。
- 注2 北欧福祉・教育研修も同様で、グループ作りと学生相互のコミュニケーションを重視する。
- 注3 北欧福祉・教育研修でも、全員がなんらかの役割を担うという点は同様である。
- 注4 バングラデシュ・タイ研修でも北欧福祉・教育研修でも、研修中に誕生日を迎える学生に対しては、ささやかでもパースディパーティを催してきた。
- 注5 北欧福祉・教育研修の「3 総合的見地から福祉も教育も考える」「6 社会を総合的構造的に見る力」と共通する。
- 注6 北欧福祉・教育研修は現在は12日間（英国が含まれていた頃は14日間）であるが、健康と安全の自己管理が必要であるという点は共通する。
- 注7 北欧福祉・教育研修でもバングラデシュ・タイ研修でも、参加メンバー全員が絵葉書を現地から相互に送り合う。書く相手に分かっていても、誰が書いた絵葉書を受け取るかは帰国後でないといけない。タイからは「戦場にかける橋」の、スウェーデンからはストックホルムを上空から写した絵葉書を使用。
- 注8 出発から帰国まで、タイムスケジュールに沿って、行動予定と注意事項を記述した小冊子を作成し、事前に渡し、説明を加えている。
- 注9 少ない自由時間を有効に使うために、観光案内とは異なる資料を独自に作成し配布してある。ヘルシンキの都電の乗り方や島へのフェリーの案内、バイキングラインの設備と楽しみ方、ストックホルムのオペラや

コンサートの内容と時間が分かるようにしている。

- 注10 バングラデシュ・タイの研修ではたくましく適応力のある学生が多いせいか、食事の問題はあまりなく、かえって暴飲暴食が心配なほどであるし、英語の会話力がある学生も多く、食事や英語に関してはあまり問題にならない。
- 注11 この原稿をほぼ完成させた直後、アメリカにおける同時多発テロ事件（2001年9月11日）が発生した。今後の国際情勢に暗雲が垂れこめ、海外研修も影響を受ける可能性がある。原稿の中でもふれたが、平和がなくては何もできない。